

苫小牧市美術博物館 紀要

第 9 号

(苫小牧市博物館 館報 通算20号、苫小牧市博物館研究報告 通算32号)

旅客フェリー航路(苫小牧ー八戸)における海鳥および海生哺乳類の観察記録

江崎 逸郎

苫小牧市内の小中学校における書写教育に関する調査

沖津 かな

(令和5年度)

苫小牧市美術博物館

旅客フェリー航路(苫小牧-八戸)における 海鳥および海生哺乳類の観察記録

江崎 逸郎¹

1. はじめに

四方を海に囲まれた日本列島近海の洋上では、多くの種類の海鳥や海生哺乳類が記録されている。また、日本列島は多くの島嶼を有し、アホウドリ *Phoebastria albatrus* やカムリウミスズメ *Synthliboramphus wumizusume* など世界的にも希少な海鳥が繁殖しているほか、ザトウクジラ *Megaptera novaeangliae* など大型鯨類の繁殖海域も複数存在している。近年、海洋生態系の上位種である海鳥と海生哺乳類は、海洋環境のバロメーターとして注目され、行動や回遊など海洋生態系保全のための基礎となる情報が様々な方法で収集、蓄積されている。一方で洋上の分布については、陸上からの観察が困難なこともあり情報の蓄積が進んでいない(風間ほか 2010)。

北海道の苫小牧港から青森県の八戸港を結ぶ旅客フェリー航路の洋上は、海鳥の重要生息地であるマリンIBA (Marine Important Bird and Biodiversity Areas) に選定されている。この海域の海鳥と海生哺乳類の情報は、旅客フェリーに乗船した乗客によってネット上及び雑誌等に観察情報が複数発信されているが、正式な記録として報告された例は少ない。今回、本海域の海鳥と海生哺乳類の洋上分布データの蓄積を目的とし、旅客フェリー上から目視による調査を行ったので報告する。

2. 調査方法

調査は北海道苫小牧市の苫小牧西港(42度38分15.06秒,141度38分2.70秒)と、青森県八戸市の八戸港(40度32分52.78秒,141度30分23.69秒)を結ぶ約242kmの航路の旅客フェリーに乗船し、2023年3月23日、3月24日、5月24日、5月25日の計4回、海上センサスを行った。3月23日と5月24日は苫小牧港を9時30分に出発し、18時に八戸港に到着する「シルバーエイト」(総トン:9,483トン、航海速力:20.5ノット)を、3月24日と5月25日は八戸港を8時45分に出発し、16時に苫小牧港に到着する「シルバプリンセス」(総トン:10,536トン、航海速力:20.5ノット)を利用した。調査は、出港してから防波堤を過ぎて開始し、途中休憩を約1時間挟んで、入港地の防波堤の内側に入る、もしくは日没により海鳥が視認できなくなるまでの約6~7時間の間に行った。途中、濃霧や高波などの海況不良で調査続行が不可能な場合は中止したほか、適宜休憩した。

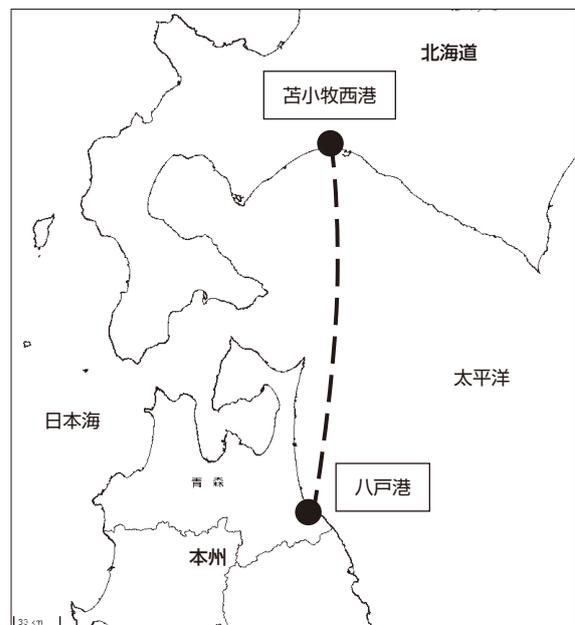


図1. 調査を行った苫小牧、八戸の航路(破線)
(出典:地理院地図「白地図」を加工)

調査は筆者1名で行い、右舷前方もしくは左舷前方の甲板から10倍の双眼鏡を用いて、綿貫・

1 苫小牧市美術博物館 主査(学芸員)

高橋(2016)に従い船体から300mを観測範囲として、海上に出現した鳥類、海生哺乳類の種類(種の同定が困難な場合は科、属レベルまでの同定とした)、個体数、行動(採餌など)、観察時刻を記録したほか、GPS(GARMIN etrex 30)を用いて観察位置を記録した。

3. 結果

計4回の調査で、海鳥10科27種1149羽(表1)、海生哺乳類2科2種139頭が観察された(表2)。海鳥については観察された科を比較するため、月ごとの個体数のグラフを作成した(図2)。

表1. 旅客フェリー航路(苫小牧-八戸)における海鳥の個体数(2023年)

科名	種名	3月23日	3月24日	5月24日	5月25日	合計
		苫小牧-八戸	八戸-苫小牧	苫小牧-八戸	八戸-苫小牧	
カモ科	クロガモ	4	-	-	-	4
アビ科	アビ科の一種	-	-	1	-	1
アホウドリ科	クロアシアホウドリ	6	8	10	19	43
	コアホウドリ	41	42	21	23	127
	アホウドリ	2	2	-	-	4
ミズナギドリ科	フルマカモメ	1	2	1	-	4
	オオミズナギドリ	-	-	50	21	71
	ハイイロミズナギドリ	-	-	-	2	2
	ハシボソミズナギドリ	-	-	2	1	3
	ミズナギドリ科の一種	7	1	8	95	111
ウミツバメ科	ウミツバメ科の一種	-	-	2	-	2
ウ科	ヒメウ	-	-	9	2	11
	ウミウ	1	-	-	-	1
	ウ科の一種	-	-	-	2	2
シギ科	アカエリヒレアシシギ	-	-	-	25	25
	ヒレアシシギ属の一種	-	2	5	23	30
カモメ科	ミツユビカモメ	245	190	-	-	435
	ウミネコ	11	2	34	33	80
	カモメ	-	1	-	-	1
	セグロカモメ	1	4	1	-	6
	オオセグロカモメ	16	5	8	1	30
	アジサン	-	-	-	2	2
	カモメ科の一種	64	-	1	2	67
	アジサン属の一種	-	-	4	-	4
トウゾクカモメ科	オオトウゾクカモメ	-	-	4	-	4
	トウゾクカモメ	-	2	-	-	2
	クロトウゾクカモメ	-	-	-	2	2
	トウゾクカモメ科の一種	-	3	4	-	7
ウミスズメ科	ハシブトウミガラス	-	2	-	-	2
	ウミガラス	-	-	1	-	1
	ウミスズメ	6	6	-	-	12
	カンムリウミスズメ	-	-	-	10	10
	ウトウ	2	3	-	-	5
	ウミスズメ科の一種	6	32	-	-	38
合計	413	307	166	263	1149	

表2. 旅客フェリー航路(苫小牧-八戸)における海生哺乳類の個体数(2023年)

科名	種名	3月23日	3月24日	5月24日	5月25日	合計
		苫小牧-八戸	八戸-苫小牧	苫小牧-八戸	八戸-苫小牧	
アシカ科	オットセイ	1	2	58	13	74
イルカ科	イシイルカ	-	-	31	34	65
合計		1	2	89	47	139

海鳥

海鳥の種数は調査日によって大きな差(13-15種)はなかったが、科の個体数は、3月(23日,24日)はカモメ科(539羽, 3月全体の75.0%)が最も多く、次いでアホウドリ科(101羽, 同14.0%)、ウミスズメ科(57羽, 同8%)であった。5月(24日, 25日)はミズナギドリ科(180羽, 5月全体の31.9%)が最も多く、次いでカモメ科(86羽, 同15.2%)、アホウドリ科(73羽, 同12.9%)であった(図2)。以下に科・種の観察概要について報告する。

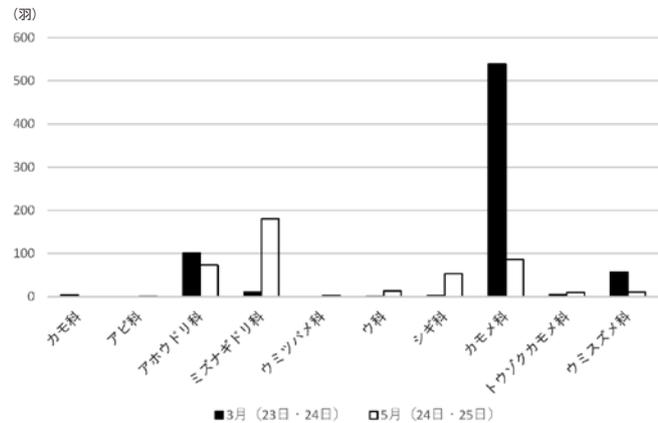


図2. 海鳥の各科における月ごとの個体数

カモメ科は、クロガモ *Melanitta americana* が3月23日に4羽観察された。アビ科は、種を特定できなかった1羽が5月24日に観察された。

アホウドリ科は、クロアシアホウドリ *Phoebastria nigripes*、コアホウドリ *Phoebastria immutabilis*、アホウドリの3種が観察された。クロアシアホウドリとコアホウドリはすべての調査日で観察され、特にコアホウドリの個体数が多かった。アホウドリは3月に少数(23日:成鳥1羽・亜成鳥1羽、24日:亜成鳥2羽)が観察され、5月は観察されなかった。

ミズナギドリ科は、フルマカモメ *Fulmarus glacialis*、オオミズナギドリ *Calonectris leucomelas*、ハイイロミズナギドリ *Puffinus griseus*、ハシボソミズナギドリ *Puffinus tenuirostris*、の4種が観察された。フルマカモメは3月23日、3月24日、5月24日に少数(1~2羽)が観察され、すべて暗色型であった。オオミズナギドリ、ハシボソミズナギドリ、ハイイロミズナギドリの3種は、すべて5月に観察され、特にオオミズナギドリの個体数が多かった。5月25日は種を特定できなかった個体が多数観察されたが、これらの大部分はハイイロミズナギドリもしくはハシボソミズナギドリと思われる。

ウミツバメ科は、種を特定できなかった2羽が5月24日に観察された。ウ科はヒメウ *Phalacrocorax pelagicus*、ウミウ *Phalacrocorax capillatus*、の2種が観察された。ヒメウはすべて5月に観察され、ウミウは3月23日に1羽のみ観察された。いずれも洋上を飛翔していた。

シギ科はアカエリヒレアシシギ *Phalaropus lobatus* の1種を観察した。3月23日を除くすべての調査日で観察されたが、5月25日が最も多かった。5月25日は種を特定できなかった個体も多数観察されたが、これらの大部分はアカエリヒレアシシギと思われる。

カモメ科は、ミツユビカモメ *Rissa tridactyla*、ウミネコ *Larus crassirostris*、カモメ *Larus canus*、セグロカモメ *Larus argentatus*、オオセグロカモメ *Larus schistisagus*、アジサシ *Sterna hirundo* の6種が観察された。ミツユビカモメは3月のみ観察され、3月23日が最も個体数が多かった。また、観察されたすべての種の中で最も多くの個体数が観察された。ウミネコはすべての調査日で観察され、5月24日が最も個体数が多かった。カモメは3月24日に1羽が観察されたのみだった。セグロカモメは5月25日を除くすべての調査日に観察されたが、少数(1~4羽)だった。オオセグロカモメはすべての調査日で観察され、3月23日が最も個体数が多かった。アジサシは5月25日に2羽観察され、5月24日にもアジサシと思われる個体が4羽観察された。

トウゾクカモメ科は、オオトウゾクカモメ *Stercorarius macormicki*、トウゾクカモメ *Stercorarius pomarinus*、クロトウゾクカモメ *Stercorarius parasiticus*、の3種が観察された。オオトウゾクカモ

メは5月24日のみ観察された。トウゾクカモメは3月24日のみ観察され、クロトウゾクカモメは5月25日のみ観察された。トウゾクカモメとクロトウゾクカモメは識別が難しく、特定できなかったが双方のいずれかと思われる個体が5月24日に4羽観察された。

ウミスズメ科は、ハシブトウミガラス*Uria lomvia*、ウミガラス*Uria aalge*、ウミスズメ*Synthliboramphus antiquus*、カンムリウミスズメ、ウトウ*Cerorhinca monocerata*の5種が観察された。ハシブトウミガラスは3月24日のみ、ウミガラスは5月24日のみ観察された。ウミスズメとウトウは3月24日と3月25日のみ観察された。カンムリウミスズメは5月25日のみ観察された。6羽と4羽の2群で、いずれも洋上を遊泳していた。3月24日は海況不良により種を特定できなかったウミスズメ科の個体が多数観察されたが、これらの大部分はウミスズメもしくはウトウと思われる。

海生哺乳類

海生哺乳類はオットセイ(アシカ科)*Callorhinus ursinus*とイシイルカ(マイルカ科)*Phocoenoides dalli*の2種が観察された。オットセイはすべての調査日で観察されたが、ほとんどが5月に観察された。5月に観察されたオットセイは、5~10頭ほどの群れで海面から脚鰭を出して浮いている状態を多く観察した。イシイルカは5月のみ観察された。こちらでも数頭から10頭前後の群れで移動中の個体を多く観察した。

4. おわりに

5月と比較して3月に多く観察されたウミスズメ、ウトウを含むウミスズメ科、ミツユビカモメを含むカモメ科の海鳥は、その多くが冬鳥である(藤巻 2012)ため、本海域を越冬場所として利用している可能性が考えられる。また、春は本調査で観察されたミズナギドリ科の海鳥が飛来する時期であり(藤巻 2012)、日本周辺海域で越冬したオットセイも太平洋を北上する時期(Gentry 1998)であることから、これらの海洋生物が5月に多く観察されたと考えられる。近接する津軽海峡では、一年を通して種によって分布する時期が異なることが分かっている(倉沢ほか 2021)。より詳細なデータを蓄積するために、本海域でも一年を通じた出現傾向を調べる必要があるだろう。

引用文献

- 風間健太郎・伊藤元裕・新妻靖章・桜井泰憲・高田秀重・William J.Sydeman・John P.Croxall・綿貫豊(2010)海洋環境モニタリングにおける海鳥の役割とその保全. 日本鳥学会誌59(1):38-54.
倉沢康大・平田和彦(2021)津軽海峡における海鳥の密度の変化. Bird Research 17:31-44.
Gentry, R. L.(1998)Behavior and Ecology of the Northern Fur Seal. Princeton University Press, New Jersey, 392 pp.
藤巻祐蔵(2012)北海道鳥類目録. 日本野鳥の会十勝支部, 帯広.
綿貫豊・高橋晃周(2016)海鳥のモニタリング調査法. 共立出版, 東京.



写真1. 調査風景(2023年3月23日)



写真2. 調査風景(2023年5月25日)



写真3. 苫小牧港(2023年5月24日)



写真4. 八戸港(2023年3月24日)



写真5. フェリー「シルバーエイト」



写真6. クロアシアホウドリ



写真7. コアホウドリ



写真8. アホウドリ



写真9. ミズナギドリの群れ



写真10. アカエリヒレアシシギ



写真11. ミツユビカモメ



写真12. オオトウゾクカモメ



写真13. ハシブトウミガラス



写真14. カンムリウミスズメ



写真15. オットセイ



写真16. イシイルカ

苫小牧市内の小中学校における書写教育に関する調査

沖津 かな¹

1. はじめに

文化庁が2020(令和2)年に12歳以上の国民1,500人を対象に実施した「書道に関する国民意識調査」において、「過去の書道経験・内容」の設問に対し、「これまでに経験したことがない」との回答は7.4%であり、それ以外は何らかの書道経験があると回答した。その中でも「小学校や中学校の授業で経験した」との回答は85.2%と最も多く、国民の書道経験の中で義務教育は大きなウェイトを占めている。

一方で、苫小牧市内の教職員や小学生の保護者の声から、以前はほとんどの学校で宿題となっていた書初めが、近年は学校により実施されない等、現状に変化があることがわかった。

このことから、義務教育の現場における書写教育の現状と課題を把握することを目的に、苫小牧市内の小学校・中学校を対象に調査を実施した。

2. 調査の概要

調査項目は書初めを中心にした内容のほか、コンクールの実施状況などについて設定した。項目の設定については、「日本書道ユネスコ登録推進協議会」が、2018(平成30)年に実施したアンケート調査を先行調査として参考にした。この調査は全国の小中学校をはじめ、各書道団体等を対象に実施されており、2019(平成31)年に「書道文化に関する基礎調査報告書：(付)書道団体実態調査」としてまとめられている。同協議会は「日本の書道文化」を国際連合教育科学文化機関(ユネスコ)の無形文化遺産に登録することを目指して発足され、「日本の書道文化－書き初めを特筆して－」を申請名称として運動を行っている(日本書道ユネスコ登録推進協議会ホームページ)。また、苫小牧市美術博物館(以下、当館)で教育普及事業の一環として実施している書初めのワークショップの参考にすることもふまえて設問を決定した。

調査の実施にあたり、2023(令和5)年9月に苫小牧市内の小学校22校、中学校14校、義務教育学校1校の計37校に依頼文と調査票(表1)を送付した。送付方法は教育委員会と各小中学校を週2回程度で往復するメール便と、電子メールの2つを利用した。計37校より回答があり、回収率は100%であった。

後述する調査票の集計結果における留意点として、複数回答がある設問も含まれるため、各設問の合計は必ずしも100%にならない。義務教育学校である苫小牧市立植苗小中学校は、回答内容を小学校と中学校の両方で集計した。また、小学校と中学校の傾向の違いを明らかにするため、一部の設問を除きそれぞれで集計結果を提示した。グラフの表示については、小中学校それぞれで母数及び傾向が異なることから、見やすくするために縦軸の数値が同一ではない場合がある。回答必須の設問で、回答にばらつきがあったもののみ回答数の割合を示した。

1 苫小牧市美術博物館 主任学芸員

学校名 ()

⑧ (書初めを授業で実施していないと答えた学校のみ) 実施しない理由を教えてください (複数回答可)

- A 授業時数の不足 B 指導者の不足 C 場所の不足
D その他 ()

⑨ 書初めを長期休業期間中の宿題として設定していますか。

- A 宿題・課題としている (原則全員提出) B 自由研究等の一環としている (自由提出)
C その他 ()

設問3 書写や書道に関する教育についてお伺いします。

⑩ 授業の中で書作品の鑑賞を実施していますか。

- A 実施している B 担任や担当により実施 C 実施していない D わからない

⑪ 書写に関する教育で課題となっていることは何ですか。(複数回答可)

- A 授業時数の確保 B 技術面の指導について C 鑑賞方法について
D その他 () E とくになし

⑫ 書写・書道は文化的・教育的側面から有効だと考えますか。

- A とても有効である B ある程度有効である C あまり有効ではない
D 有効ではない D わからない・その他 ()

⑬ 書写や書道に関して、苫小牧市美術博物館に期待することがあれば教えてください。

⑭ 書写や書道に関する教育について工夫していることや課題、文化や教育の一環としての書道について等、自由なご意見をお聞かせください。

調査内容は以上です。大変お忙しい中、ご協力ありがとうございました。

3. 調査結果

設問1 書道展等についてお伺いします。

① 校内で書道展やコンクールを実施していますか。

小学校では「学年で実施」と回答したのが1校、他は「実施なし」との回答であった(図1)。中学校では8校(53.3%)が「実施なし」、「全校で実施」が5校(33.3%)、「学年で実施」が1校(6.7%)、「その他」が2校(13.3%)と小学校に比べ実施率が高かった(図2)。なお、「その他」と回答した2校は、いずれも部活動での実施であった。

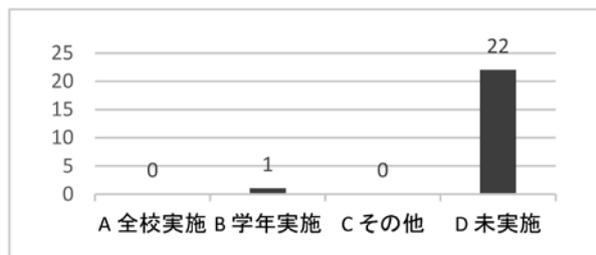


図1 ①校内書道コンクール(小学校)

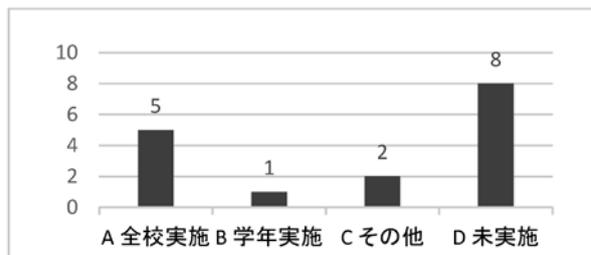


図2 ①校内書道コンクール(中学校)

② 校外の書道展やコンクールに参加していますか。

③ (②で参加していると答えた学校のみ)どのような形態で参加していますか。

④ (②で参加していると答えた学校のみ)参加している書道展の主催者を教えてください。また、差し支えない範囲で書道展の名称をご記入ください。(自由記述)

②には小学校では「参加している」と回答したのが1校(4.3%)、他22校は「参加していない」(95.7%)との回答であった(図3)。参加していると回答した1校の参加形態は「希望する児童・生徒が参加」、主催者は不明との回答だった。

中学校では「参加している」と回答したのが4校(26.7%)であった(図4)。そのうち、③で「希望する児童・生徒が参加」と回答したのは1校、「クラブ・部活単位で参加」と回答したのが3校であった。④で挙げられた書道展の名称としては、筆の生産量が日本一である広島県熊野町が主催する「全国書画展覧会」が3校と最も多く、他に「日本書道研究会」「全国少年新春書道会」「北海道学生書道展覧会」が1校ずつ挙げられた。

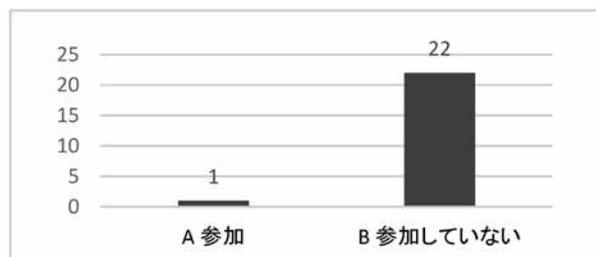


図3 ②校外書道コンクール(小学校)

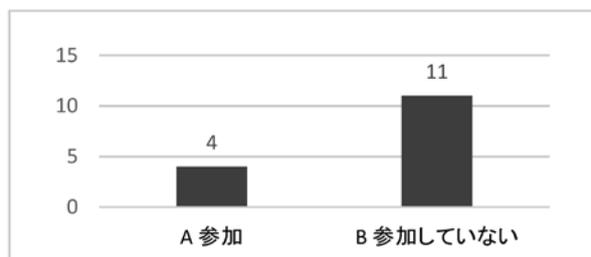


図4 ②校外書道コンクール(中学校)

設問2 書初めについてお伺いします。

⑤ 学校の授業の中で書初めを実施していますか。(家庭での宿題をのぞく)

小学校では「学年全体で実施」が15校(65.2%)、「学校全体で実施」が8校(34.8%)で、実施学年の違いはあるが、全校で実施されていた(図5)。このうち、「学年全体で実施」と回答した学校での実施学年は4～6年生と回答した1校を除き、すべて3～6年生であった。これは小学校の学習指導要領(平成29年告示)において毛筆を使用する書写の指導は第3学年以上の各学年で行うとされていることが関係していると考えられる。

中学校では半数を超える8校(53.3%)が実施しておらず、「学校全体で実施」は5校(33.3%)、「学年全体で実施」及び「クラブ活動などで実施」が1校ずつであった(図6)。なお、「学年全体で実施」と答えた学校の実施学年は1・2年生であった。

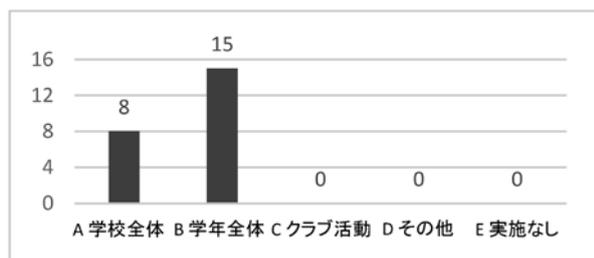


図5 ⑤書初めの実施(小学校)

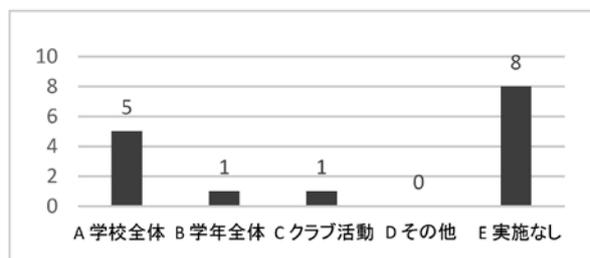


図6 ⑤書初めの実施(中学校)

⑥ 書初めでアウトリーチ等の外部講師を利用していますか。(利用予定含む)

⑦ (⑥でA、Bと答えた方学校のみ)どのような形態で利用していますか。

⑥には小学校では「利用していない」との回答が最多で11校(47.8%)であり、「生涯学習課のアウトリーチを利用」と回答したのが5校(21.7%)であった(図7)。このアウトリーチ推進事業は苫小牧市教育委員会の教育部生涯学習課で実施されている。「苫小牧アーティスト・バンク」に登録されているアーティストを派遣する事業で、書道関係では現在「苫小牧書道連盟」の1団体が登録されている。「その他講師に依頼」と回答した学校は7校(30.4%)で、苫小牧市内の書道家に依頼している場合がほとんどであった。中学校では⑤の設問において書初めを授業で実施していないと回答した学校を含め、全校が利用していないと回答した(図8)。

⑦では小学校において⑥で利用しているとした12校のうち全校が「学年単位」と回答した。このうち、8校が3～6年生、1校が4～6年生で利用していると回答した。これらの回答をした学校は、いずれも書初めを授業で実施している学年と一致した。他は2校が3・4年生、1校が3年生での利用であった。

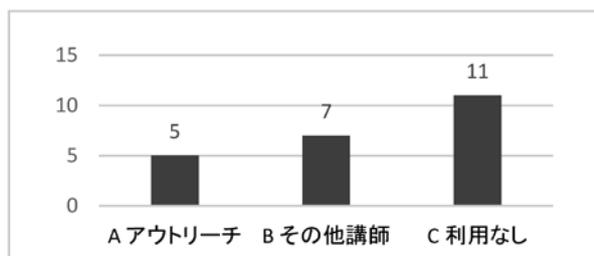


図7 ⑥アウトリーチの利用(小学校)

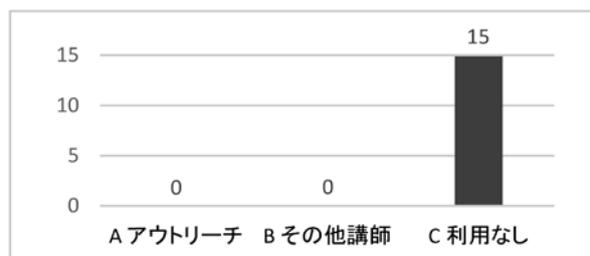


図8 ⑥アウトリーチの利用(中学校)

⑧ (書初めを授業で実施していないと答えた学校のみ)実施しない理由を教えてください(複数回答可)

⑤の問いで書初めを授業で実施していないと回答したのは全て中学校で8校(53.3%)であった。そのうち、この設問で実施しない理由として「時数不足」を挙げた学校が最多で6校、「場所の不足」が5校、「指導者の不足」が2校、「その他」が2校であった(図9)。「その他」では自由記述として「道具の不備」「新春を迎えて書くため冬休みの宿題としている」との回答があった。

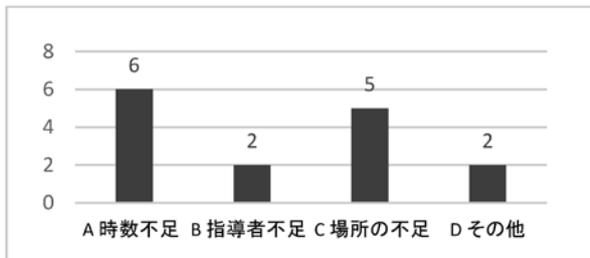


図9 ⑧実施しない理由(中学校)

⑨ 書初めを長期休業期間中の宿題として設定していますか。

小学校では「自由研究等の一環としている(自由提出)」が最多で10校(43.5%)、「宿題・課題としている(原則全員提出)」が6校(26.1%)、「その他」が4校(17.4%)、無回答が3校(13%)であった(図10)。「その他」の内訳としては、「宿題にはしていない」が2校、「年によって違う」「宿題にはしていないが、提出する児童がいる」が1校ずつであった。

中学校では「その他」が最多で8校(53.3%)、「宿題・課題としている(原則全員提出)」が4校(26.7%)、「自由研究等の一環としている(自由提出)」が2校(13.3%)、無回答が1校(6.7%)であった(図11)。「その他」の内訳としては、「設定していない」が5校、「授業で取り組み、できなかった生徒のみ休み中の宿題にしている」「授業で練習し、書初大会(席書会)を全校で実施している」、記入なしが1校ずつであった。

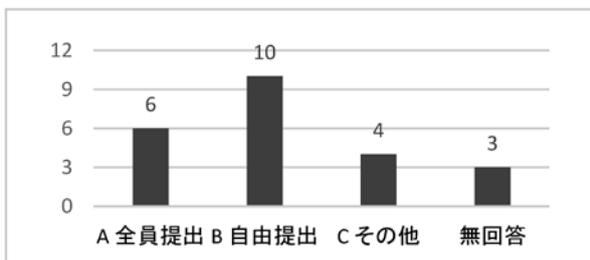


図10 ⑨書初めの宿題(小学校)

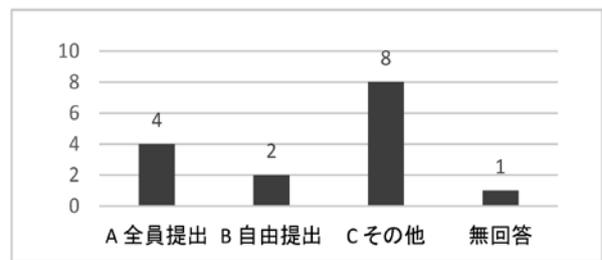


図11 ⑨書初めの宿題(中学校)

設問3 書写や書道に関する教育についてお伺いします。

⑩ 授業の中で書作品の鑑賞を実施していますか。

小学校では「実施していない」が最多で11校(47.8%)、「実施している」が6校(26.1%)、「担任や担当により実施」が5校(21.7%)、「わからない」が1校(4.3%)であった(図12)。中学校では「実施していない」が最多で6校(40.0%)、「担任や担当により実施」が5校(33.3%)、「実施している」が4校(26.7%)であった(図13)。

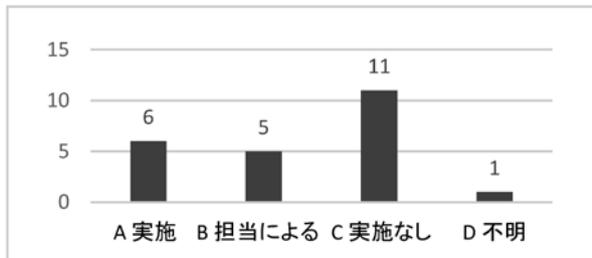


図12 ⑩書作品の鑑賞(小学校)

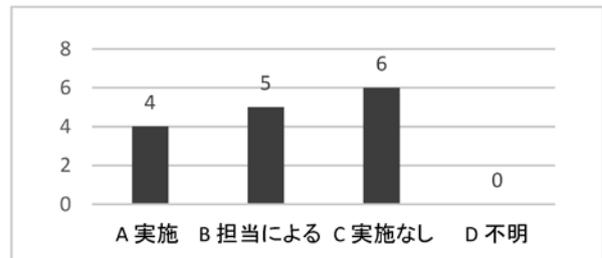


図13 ⑩書作品の鑑賞(中学校)

⑪ 書写に関する教育で課題となっていることは何ですか。(複数回答可)

小学校では「技術面の指導について」が最多で17校(73.9%)、「鑑賞方法について」が7校(30.4%)、「とくになし」が4校(17.4%)、「授業時数の確保」「その他」が2校ずつ(各8.7%)であった(図14)。「その他」の自由記述としては、「書初めの学習は年1回の取組でやらせっぱなしになっている。道具の購入を保護者をお願いしているので、もう少し活用できればよいが、時数や場所の確保も難しい」「準備や片付けの時間の確保」といった意見が挙がった。

中学校では「授業時数の確保」が最多で7校(46.7%)、「技術面の指導について」「とくになし」がいずれも5校(各33.3%)、「鑑賞方法について」「その他」が1校ずつ(各6.7%)であった(図15)。「その他」の自由記述としては、「机・椅子・教室などの環境(机が小さい等)」が挙がった。

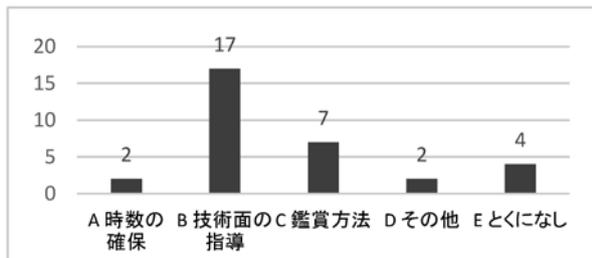


図14 ⑪課題(小学校)

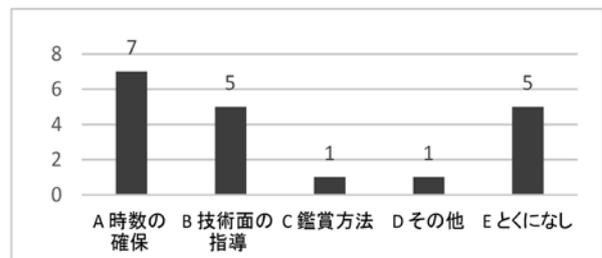


図15 ⑪課題(中学校)

⑫ 書写・書道は文化的・教育的側面から有効だと考えますか。

小学校では「ある程度有効である」が最多で12校(52.2%)、「とても有効である」が10校(43.5%)、無回答が1校(4.3%)であった(図16)。中学校では「とても有効である」が最多で8校(53.3%)、「ある程度有効である」が7校(46.7%)であった(図17)。自由記述として「非常に有効であり、低学年、低年齢ほど効果が高いと考える」との意見が挙げられた。

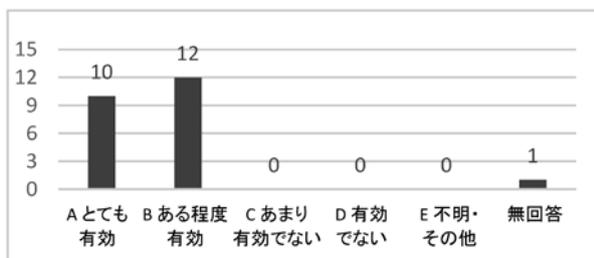


図16 ⑫有効性(小学校)

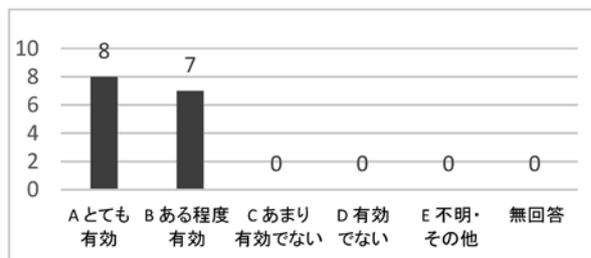


図17 ⑫有効性(中学校)

⑬ 書写や書道に関して、苫小牧市美術博物館に期待することがあれば教えてください。(自由記述)

この設問では、大別すると講師としての派遣や出前授業を希望する学校が4校、書道展やコンクールの開催を希望する学校が4校、様々な作品の展示を希望する学校が1校であった。(表2)

以下の自由記述の中にある「苫教研」とは、「苫小牧市教育研究会」の略称であり、苫小牧市内の教職員が主催していた教育に関する研究活動を行う任意団体である。1985(昭和60)年に699人の会員で設立され、教職員の専門性を高め、市内教育の充実や発展を図ることを目的とし、公開授業や研究発表、講習会を実施してきた。複数の研究部会が設けられ、その部会のひとつとして書教育研究部会があった。「小中学生硬筆習字作品展」「市民文化祭小中書道展」「小中学校書き初め展」などの作品展を主催し、市内小中学生に発表の場を提供していた。

しかし、新型コロナウイルス感染症拡大による活動中止や、教職員の働き方の改革、教職員相互の新しい連携体制の整備などの影響もあり、2021年度をもって苫小牧市教育研究会は閉会となった。これにともない書教育研究部会により主催されていた各作品展も終了となった。自由記述の中では長年実施してきたこれらの作品展の継承を望む声が挙げられた。

表2 ⑬の問いに対する自由記述(原文)

講師として来校いただきたい
いろいろな作品の展示
授業における講師
書写に関する出前授業の実施をしていただけると助かります。
できるならば、これまで苫小牧市教育研究会で培ってきた「書初め展」などの取り組みを残してほしい。
書はワープロの文字にはない美しさがあるので書を得意とする生活の活躍の場(コンクールなど)の充実を期待します。
講師の派遣、コンクールの実施(以前苫教研主催で行っていました)

以前は書道展がありました。苫小牧市がなくなって、校外で作品する機会がなくなりました。市内小中学生の書道展などあるといいと思います。

⑭ 書写や書道に関する教育について工夫していることや課題、文化や教育の一環としての書道について等、自由なご意見をお聞かせください。(自由記述)

この設問では様々な意見が寄せられ、大別すると授業内容についての工夫や意識していることを挙げた学校が4校、アウトリーチの充実を希望する学校が3校、美術分野の中での書道としての展開に着目する学校が1校であった(表3)。

表3 ⑭の問いに対する自由記述(原文)

<ul style="list-style-type: none"> ・工夫：教科書に記載されたQRコードの活用。 ・毛筆を使うことで、「はらい」や「はね」など力加減がわかり、硬筆にいかせます。 ・教科書の内容も毛筆と硬筆のつながりを大切にしてつくられているので、私達教える側も、そのあたりを意識して指導できれば良いのではと思います。タブレットを使うことが増え、字を書く機会が以前より少なくなっている今だからこそ、美しい文字を書くポイントなどを教える貴重な書写の時間を大切にしたいと思っています。
<p>書写と書道は異なり、学校教育の中で書写は国語教育の一環としてあつまっている。美術としての学習が展開できればなお広がるのではないかと</p>
<p>⑪に記入したように、講師は時間の都合上、3年生の指導しかお願いできないので他学年は学年で指導することになる。技術面の指導について、課題が残る。書初めの授業を一貫して外部講師にお願いできると助かるのですが。</p>
<p>技術的な面で苦勞している若手の先生が多いので、講習会の実施や、アウトリーチの充実などがあればと思います。</p>
<p>アウトリーチは学校の負担が少ないので、アウトリーチの活用がよりしやすくなるとよい。</p>
<p>授業では書写に取り組んでいますが、教室が狭かったり、机が道具でいっぱいになる等の不自由なことが多々あり、道具の置き方や練習方法などを工夫しています。また、部活動で書道部があるため、書いた作品をコンクールに出品したり、校内の掲示板を使って掲示したりと啓蒙活動を心がけています。特に毛筆作品は書く側も見る側も興味関心をもって取り組む傾向が強いと感じます。</p>
<p>上手に書きたいと願う生徒が多いので手本のどこに注目したらよいか、筆脈の考え方などの指導をしています。</p>
<p>伝統文化の継承の一つとして書道の重要性を認識している。</p>
<p>平仮名は字源を意識させて指導しています</p>

4. 考察

先行調査として参考にした「書道文化に関する基礎調査報告書」(以下、基礎調査報告)と比較すると、②「校外の書道展やコンクールに参加していますか。」において、基礎調査報告では「参加している」と答えた割合が小学校で94.7%、中学校で92.4%と、当市の小学校4.3%、中学校26.7%と大きく差がついた。基礎調査報告では、参加している書道展等の主催としてJA共済(小学校73.0%、中学校66.2%)、県や市区町村などの自治体(小学校67.1%、中学校64.9%)が特に多かった。当市では前述した苫小牧市教育研究会が主催していた各展覧会が廃止となり、子ども達が学びの成果を発表する場が他の自治体と比べ少なくなっていることが分かる。

⑤「学校の授業の中で書初めを実施していますか。」において、小学校は全校が実施していると回答した一方で、中学校では半数を超える8校(53.3%)が実施していないと回答した。実施しない理由として最も多かったのが「授業時数の不足」が6校(46.7%)であり、⑪「書写に関する教育で課題となっていることは何ですか。」においても、中学校は「授業時数の確保」が最も多く7校(46.7%)であった。

現行の学習指導要領では小学校の場合、「毛筆を使用する書写の指導は第3学年以上の各学年で行い、各学年年間30単位時間程度を配当する」とされている一方で、中学校では「書写の指導に配当する授業時数は、第1学年及び第2学年では年間20単位時間程度、第3学年では年間10単位時間程度とすること」とされており、相対的な時数の不足は否めない。また、硬筆と毛筆の区別もされていないことから、場所や片付け時間の確保が必要となる書初めは敬遠されがちと考えられる。

同じく⑪の課題については、小学校では「技術面の指導」と答えたのが17校(73.9%)と多くを占めた。高等学校の芸術科目である書道と異なり、必ずしも毛筆に慣れているとは限らない教職員が複数の児童を一斉に指導することは、相当の工夫と努力が必要であることは想像に難くない。これらは⑭の自由記述において、講習会やアウトリーチの充実を望む声が複数あげられたことからも見えてくる。⑬で当館へ期待することとしてあげられた、コンクールの実施や講師の派遣とあわせ、学校との連携や教育普及の実践として、今後検討の余地があると考えられる。

これらの課題が見えてきた一方で、⑭の自由記述では、それぞれの学校で狙いを意識し、指導方法に工夫を凝らしていることが垣間見えた。書道部が活動している学校もあり、授業以外でも書道に親しむ環境がある様子が伺えた。また、⑫の「書写・書道は文化的・教育的側面から有効だと考えますか。」には小中学校ともにすべての学校が「とても有効」か「ある程度有効」と答え、有効性を実感していることが分かった。

5. おわりに

2023(令和5)年12月18日に開催された文化審議会無形文化遺産部会において、令和5年度のユネスコ無形文化遺産(人類の無形文化遺産の代表的な一覧表)への提案候補として「書道」が選定された。選定理由としては、日本の文化の多様性や深みを世界に広く発信していく観点等を踏まえ、文化財保護法上登録された生活分野のうち、ふさわしいものを提案対象とした中で、「書道」が最も条件を満たしていると判断されたことによる。「書道」は2021(令和3)年に「生活文化に係る歴史上の意義を有するとともに、芸術上の価値が高いものである」(令和3年10月15日文化審議会答申)と判断され、国の登録無形文化財にも登録されている。これらの動きは、時代の変化の中でも書道が世界に誇るべき日本の文化として息づいていることを示している。

小中学校においては授業にもタブレット端末が導入されるなど文字を書く機会が減少しつつあるが、今回の調査の中で、美しい字を書くことや、伝統文化としての書の重要性を認識する声

も挙げたことは、希望が持てる結果であった。今回の調査で明らかになった現状を踏まえ、課題の解消について学校だけで留まらずどのようなアプローチができるか探求していきたい。

末尾ながら、本稿の執筆にあたり、調査にご協力いただいた苫小牧市内の各小中学校の皆様に感謝申し上げます。

引用・参考文献

文化庁地域文化創生本部事務局 2020 『令和2年度 生活文化調査研究事業(書道)報告書』 文化庁地域文化創生本部事務局

日本書道ユネスコ登録推進協議会 ホームページ <http://www.shodoisan.jp/> (2024年1月24日閲覧)

日本書道ユネスコ登録推進協議会調査委員会 2019 『書道文化に関する基礎調査報告書：(付)書道団体実態調査』 日本書道ユネスコ登録推進協議会調査委員会

苫小牧市教育研究会事務局(編) 1994 『苫教研 結成20年記念誌』 苫小牧市教育研究会

文部科学省(編) 小学校学習指導要領(平成29年告示) 文部科学省

文部科学省(編) 中学校学習指導要領(平成29年告示) 文部科学省

苫小牧市美術博物館 紀要

第9号

(令和5年度)

発行日 令和6年3月
編集・発行 苫小牧市美術博物館
〒053-0011
北海道苫小牧市末広町3丁目9番7号
TEL. 0144(35)2550
FAX. 0144(34)0408
印刷 北光印刷株式会社